

日 時 平成 27 年 11 月 14 日(土)
 場 所 東京学芸大学附属世田谷中学校
 対 象 2 年 C 組 40 名
 授業者 扇 田 浩 水

1, 単元名 『近代文学を読み継ぐために～百年文庫をリライトしよう～』

主題 「近代文学を読み継ぐために」という視点で課題設定・追及し、解釈につなげる。
 内容 読みづらいとされる近代文学を『百年文庫』を使ってリライトするために、グループで解説をつくる。

2, 単元の設定について

(1) 教材化にあたって (これまでの学習の流れ)

・ 1 年生

この学年は、1 年生の時から授業者が受けもってきた生徒である。1 年生の読書活動として、「ワタシの一行」という単元を設け、新潮社の企画する「ワタシの一行大賞」に応募するという学習を経験している。自分で選んだ本の中から、お気に入りの一行を抜き出し紹介しようという試みで、本の中の言葉を自分がどう捉え、価値づけるかを言語化するという作業である。1 年生には取り組みやすく、目的をもって鑑賞することができた。単に読みすごしてしまう読書を評価の対象として捉え、共有を図ることで読解への深まりがみられた。そこから発展し、一行を抜き出すだけではなく本文の解釈をより深めていくためには今後どのような単元設定がふさわしいか考えていった。読みやすい読書から、つまずきのある読書への発展が、課題解決を核とした単元になるのではという思いから、近代文学を読み継いでいこうという試みにつながっている。

・ 2 年生

2 年生の 2 学期には、近代文学新聞を書いて芸術発表会で展示する、という本校の例年の流れがある。そこで、2 年生の 1 学期から文学作品を読むことを意識的に行ってきた。まずは近代文学新聞に何を書くか？というのが出発点であったため、好きな作家を選んで書くという以前行ったスタイルとは違うものを模索していた。前回の新聞づくりでは似たような内容の紙面に少し飽きてしまった印象があり、資料集を読んでいるような新聞になってしまったという反省があったからだ。好きな作家と言っても 160 人の生徒が選ぶため、資料集に大きく取り上げられる有名作家が中心で、選ばれた作家のランキングなどを行ったが、特に世の中の人気や評価と大きな隔たりもなく、文豪が軒を連ねるという形の結果となった。

そこで、今回は班の活動を取り入れ、違う作家や作品を調べて発表し合う授業を行うことにした。それに役立つような新聞を書くことをねらいとした。個人の書いた新聞がただ展示されて終わるのではなく、班の調べ学習に役立つようなものとして「読まれる」ことを目的においた新聞づくりである。結果として、調べ学習の際に作家について簡潔に分かる資料として閲覧している生徒が多く見られた。新聞は授業中いつでも見られるように ICT を活用して教室のプロジェクターで閲覧可にしておいた。

調べ学習は図書館との協働で行うため、どのような形が望ましいか学校司書と協議をし、『百年文庫』というシリーズの文庫を使った授業を行うことにした。多くの近代文学作品が収められており、短編であることから扱いやすい点、代表的な作品ばかりではないため調べたり話し合ったりするのに適していた点などが取り上げた理由である。図書館に所蔵されながらも中々利用されない本をいかに動かしていくか、という図書館側のねらいとも合った課題設定をすることができた。

『百年文庫』に収められている作家の中から、64 名の近代文学作品を授業者が選んだ。そこから、40 名 4 クラスの 160 名が各自で担当することになった作品を読んでいった。クラスにその作家を扱うのは自分一人という状況である。まずは読んでみてリライトするという課題を出した。1 学期中に読み終わらせ、夏休みに新聞づくりを行うための土台である。リライトの条件としては、「中学生にも分かりやすく」すること、「文章の表現や描写の魅力はなるべくいかに」と、200 字以内にまとめることとした。書きかえ、ということ自体が手さぐりの生徒達にと

って非常に難しい課題であったが、のちに班で話し合い丁寧にリライトまでの授業を行うため、まずは難しいということを感じ、リライトするまでにはどのような過程が自分たちには必要か感じてもらうためにも必要な作業であった。また、それを新聞に載せるため大切な項目であった。

夏休み中にリライトした作家について新聞を書き、2学期の芸術発表会の展示の後、クラスで読み合った。40名の作家の中から好きな作品を選んで、8名まで絞った。そこからの学習の流れは全体計画に示すとおりである。

(2) 単元構成について

①「読むこと」のために「話す・聞く」を中心に

単元の大きなねらいは近代文学小説を読み、読解することである。それらにおける洗練された言葉を味わい、描かれている心情や価値観を読みとり感想を交流することが重要な言語活動である。しかしそのために必要なことは何か？を生徒と一緒に考えていくことがこの単元においてより重要な点であった。それは、彼らにとって明治・大正・昭和という時代の作品が、解説なしで理解できるほど身近でも容易でもないからである。さらにいえば、どうしても読みたいという欲求を感じるものでもない。魅力がある程度予感として感じられるものでなければ、彼らが今後近代文学を読み深めていくことはまずないだろう。そこで、その難解さに着目し、何が中学生にとって分かりにくさの要因なのかを探り、それらを中学生に解決させていくことで、読み継がれていくために必要な手立てを生徒・授業者共に獲得していくことができるのではないかと考えた。そのために選んだのが解説づくりとリライトである。リライトできるということは読解もできているということであると考え、そこを到達点としてそれに至る解説づくりをプロセスとして置くことにした。それは個人でリライトするまでに必要な知識や読解力を班で高め合うという作業である。このように「話す・聞く」活動は班の話し合いを通して行われ、中学生にとって必要な解説とは何か、を自分たちで考えていった。作品の読解という主体的な立場での読みと、作品の評価という客観的な考察とを解説に取り入れた。それを書くために、班では「本文の中で分からないと感じる点はどこか？」という具体的な課題を取り上げさせ、描写や内容などと絡めながら話し合わせた。そのような積み重ねが作品の読解につながっている。議論の中心となる課題を自ら見つけ出し、話し合い解釈していくという過程を追うことで、互いの発言を検討したり、自分の読みを広げたりすることができてきている。

②「書くこと」を目標に

解説づくりは、班の話し合いの成果なくして完成できないが、リライトはその解説を参考にして自分自身で書くという試みである。そこに話し合いは必要なく、自分の解釈こそが最も重要である。そこに到達するためのこれまでの話し合いであった。そのことに気付き、自分の知識や見解と班の成果をつなぎ合わせて、いかに分かりやすく魅力的なリライトを書けるかが自分との切磋琢磨である。そのために必要なリライトの条件は、解説が完成したのちに詳しく設定する。中学生に読んでもらうには、という相手意識をもち、読解への手立て、入口となるために有効な条件とは何かを生徒たちとともに考えていく。自分たちが感じとった面白さや描写の美しさなど評価すべきところはそのままに、難解さは噛み砕く必要がある。描写や表現の工夫は切り捨てずに使うべきであるし、場面の再構成は短くするために自ら行うことになる。全文を短くリライトするか、好きなシーンを切り取りリライトするかの2種類から選んでリライトを行う予定である。全文のリライトでも最大800字以内に収めることを条件にし、中学生でもすぐ読めるものにした。その場合に必要な条件は何かを話し合う。シーンを切り取る場合でも、800字以内とし、どのような観点で書きかえていくか設定する。分かりやすさと、描写の工夫を生かすことは視野に入れ生徒の意見を取り入れ決めていきたいと考えている。「書くこと」の言語活動として、リライトは単なる創作ではなく、優れた作品の分析や評価をしながら自分の表現や感性に豊かさや深まりをもたせることができるものだと考えている。

1. シーンを切り取ったリライトの一例

・横光利一「春は馬車に乗って」初出：1926年（大正15年）8月『女性』

（以下は『百年文庫』より引用。下線、太線は授業者による。）

(原文)

或る日、彼の所へ、知人から思わぬスイトピーの花束が岬を廻って届けられた。
長らく寒風にさびれ続けた家の中に、初めて早春が匂やかに訪れて来たのである。
彼は花粉にまみれた手で花束を捧げるように持ちながら、妻の部屋へ這入っていった。
「とうとう、春がやって来た」
「まア、綺麗だわね」と妻は云うと、頬笑みながら痩せ衰えた手を花の方へ差し出した。
「これは実に綺麗じゃないか」
「どこから来たの」
「この花は馬車に乗って、海の岸を真っ先きに春を撒き撒きやって来たのさ」
妻は彼から花束を受けると両手で胸いっぱい抱きしめた。そして、彼女はその明るい花束の中へ蒼ざめた顔を埋めると、恍惚として眼を閉じた。

(リライト)

ある日、彼の所へ、知人から思わぬスイトピーの花束が岬を廻って届けられた。
彼は妻が大変喜ぶだろうと思い、花粉にまみれた手で花束を捧げるように持ちながら、冷たい妻の部屋へ入っていった。
「とうとう、春がやって来たよ」
「まあ、なんて綺麗なの」と妻は云うと、頬笑みながら痩せ衰えた手を花の方へ差し出した。
「これは実に綺麗だろう」
「どうなさったの？」
「この花は馬車に乗って、海の岸を真っ先きに春を撒き撒きやって来たのさ」
妻は花束を受けると両手で胸いっぱい抱きしめた。そして、彼女はその明るい花束の中へ蒼ざめた顔をうずめると、そのままゆっくりと眼を閉じた。
春は花と共に訪れ、妻と共に彼の元から去っていった。

2. この例におけるリライトの観点

本文の中で特に表現、描写として美しいと感じたところ（下線・太線部）はそのまま使用し、表記の点で不自然な箇所は現代風書きかえた。端的に短くするべきところは割愛するが、重要なラストシーンなので必要と判断しここではほとんど削っていない。最後の一行に関しては、タイトルの美しさに感銘を受けたため自作の一文を添えた。

ここで示したのは生徒に示すリライトの一例とその観点（書きかえの理由）である。授業を通じた話し合いの中で、生徒はあるシーンの解釈について議論していることが多くみられた。そこにはそれぞれの読みがあり、リライトにはそれを投影して自分のオリジナル性も加味してよいのではないかと考えている。その作業は不明瞭さゆえに議論になった箇所¹に自分なりの解釈の方向を示すものであり、近代文学の難解さを中学生なりに読み砕いた表れとして生まれてくるものである。このような「書く」という活動は、これまでの「話す・聞く」の成果と、「読む」こと²の理解を表現する有効な言語活動の一つになると考えている。リライトをこの単元の最終的な目標に据えているのはそのためである。

(3) 国語科の研究主題を受けて（研究の焦点化）

本校の国語科が考える『創造』は、「人と関わる力」と「問題を解決する力」を基盤としている。この単元では、自分一人では読解できなかった文学作品を、話し合いや分析・解釈を繰り返すことで一定レベルまで理解できるようになることがねらいである。話し合いには共有や交流を通して読み深めていく効果がある。また、問題となる点を自ら課題設定することで思考力・判断力を必要とする場面が生まれる。これらを統合した上で作品のリライトという『創造』が可能になると考えている。優れた文章表現を解釈・分析する授業を通して、自らの表現力も養い、豊かな感性や確かな言語能力を育むことができるだろう。

(4) 評価について

① 評価規準について

話し合いをふまえた評価については、異なる立場や考えに対しても相手を尊重し、互いに検討し

ながらより納得のいく考えや解釈につなげていくことができたかという点が重要である。

書くことの段階では、解説の場合、目的に合わせて相手意識を明確にしたうえで書くこと（確かさ）が大切である。リライトする段階では、描写の工夫や文章に推敲を重ねるなどして豊かな感性を表現することができたか（豊かさ）がポイントとなる。読解できていなければ、リライトすることはできないし、そのためには話し合いをふまえないと解釈の幅も広がらない、といった相互関係に二つはあり、相乗効果によってより良い言語活動を支えていると考えている。

②生徒における評価活動

生徒の評価活動は、近代文学新聞から作家を選ぶ視点と、作品そのものを評価するという視点の獲得とにある。同世代の仲間の新聞を評価するという主観的な観点と、難解な近代文学の評価という客観的情報を必要とする評価活動との両方を経験することで、場合に応じて評価の根拠をいかに設定するかという視点は養われると考えている。

3、学習指導の全体計画（全8時間扱い）

次・時	ねらいと学習内容	指導上の留意点
第一次 クラスの文学新聞を読んで、読み深めたい作品を選ぼう。		
1時	<p>【ねらい】文学新聞を読んで興味のある作家または作品をひとつ選ぶ。</p> <p>【内 容】同じクラスの生徒が書いた文学新聞を読み、特に読んでみたいと思う作品を一つ選ぶ。40名の作家がいる中で、新聞という形で紹介されたことによって面白そうだなと興味の湧く作家もいれば、難しそうで面白くないと思われる作家もいる。生徒同士が作った新聞だからこそ中学生にとって検討しやすいものとなっている。新聞の内容の魅力と作品自体の魅力の両方の側面から自分が調べたい作品を選んでいく</p>	<p>○多くの生徒に選ばれた上位の作品について研究していくことになるので、新聞に書かれた内容をよく読み、作家の特徴や作品の面白さなどを限られた時間内で捉えるよう促す。</p>
2時	<p>【ねらい】調べる作品を決め解説づくりの分担を決める。</p> <p>【内 容】自分が読み深めたい作品に分かれて4人グループをつくる。解説づくりを行う際の説明をふまえたうえで、①～④の担当箇所を決める。 （①作家について②語句・キーワード③作品の読解④作品の評価）</p>	<p>○前回の授業で生徒からの人気で上位に挙がった8名の作家をとりあげ、その中から自分の調べたい作品に分かれるよう指示する。</p> <p>○担当箇所は自分がどのような観点に興味があるのかよく考えて分担する。</p>
第二次 小説の解説をつくらう。		
3時	<p>【ねらい】作家や作品について知ろう。</p> <p>【内 容】図書館で調べ学習を行う。作家や作品について書かれている本や資料を参考に、各自の担当箇所について書き進める。班で話し合いが必要な課題を作品内部から見つけ出し、検討する。</p>	<p>○本や資料は学校司書に作家別で準備してもらいすぐ活動に入れるように手助けする。（資料リストは別紙）</p> <p>○どのような本に必要な情報があるのか、迷っている生徒には助言していく。</p>

4時	<p>【ねらい】 作品の読解を進めよう。</p> <p>【内 容】 作品の内容読解を中心に、不明瞭な点、面白いと感じた点などを話し合う。前回同様に本や資料を参考にする。解説に書き込みたい、調べていきたい点について明確にしていき、班で解釈を話し合う。</p>	<p>○作品によっては文体が難解なもの、内容把握はできるが解釈の難しいもの、それぞれの班で特徴が違うため、どのような視点で調べ学習をしていくことが効率的か考えさせる。</p>
5時	<p>【ねらい】 意見交流シートに質問を書こう。</p> <p>【内 容】 班だけでの話し合いでは行き詰まり、難しいと感じている箇所について、他クラスの担当者と意見交換をするため質問を考える。質問が書かれていたクラスは返答も考える。</p>	<p>○より具体的で検討しやすい課題となるよう、作品のどの箇所についての質問か分かるように書かせる。</p>
6時 (本時)	<p>【ねらい】 意見交流シートと班の話し合いをふまえ、解説を分かりやすくまとめていく。他の班の報告を聞いて参考にしよう。</p> <p>【内 容】 意見交流シートに書かれた質問について、班で考え話し合い、返答を書く。すでに返答のあったクラスはそれを参考に解説にどのように生かすか考える。報告をするために現段階の進行状況をワークシートにまとめたり資料を用意する。</p>	<p>○全クラスの質問について検討することで、この作品ではどのようなことが問題となっているのかの動向を把握することができる。</p> <p>○自分たちの解説に何を書くべきか検討していく。</p> <p>○他の班の発表を聞くことで新たな発見をしたり、自分たちの考えに広がりをもたせたりすることが大切。</p>
7時	<p>【ねらい】 これまでの話し合いをふまえて解説を書きあげる。</p> <p>【内 容】 これまでの話し合いや班の報告を参考にし、解説を分担に分かれて仕上げていく。清書となるので、読みやすく、丁寧に書く。</p>	<p>○作品を読みやすくするための手立てとして解説が機能しているかという意識をもって書かせる。</p> <p>○自分の字で丁寧に書くことで紙面の使い方や適切な字体の使い方に慣れる。</p>
8時	<p>第三次 小説をリライトしよう。</p>	
	<p>【ねらい】 自分たちで作った解説を参考にし、作品を中学生が読みやすいように短くリライトする。自分の解釈を表現や描写に織り交ぜながら書くことができる。</p> <p>【内 容】 今回のリライトをするための必要条件を皆で考え、定義する。中学生という相手意識やそのための工夫を考えて書く。自分でも魅力的なリライトだと思える文章にするために、本文の評価を正確に行いつつ、必要な箇所は書きかえていくという作業を行う。</p> <p>具体的には、2つのパターンから選んでリライトしてよいこととする。全文を800字以内にまとめるか、好きなシーンを切り取り800字以内に書きかえるか選ぶ。(具体的なリライト例を示しイメージしやすくする。※上の「春は馬車に乗って」がその例)</p>	<p>○これまで班の話し合いをしてきたことのつながりや効果を意識させ、オリジナルのリライトをすることで、自分の読みを提示できるようにさせる。</p> <p>○人称や文体などの設定を丁寧に考えて視点を明らかにしたうえでリライトさせる。</p> <p>○努力を要する生徒には、全文ではなくシーンを切り取りリライトしてもよいことにする。</p>

4、本時の学習指導（6／全8時間）

（1）本時のねらい

- 他の班の意見を検討して自分たちの班の話し合いの幅を広げる。
- 他の班の発表を参考にして、作品に対する自分の考えを広げたり深めたりする。

（2）本時の展開

分	学習事項と学習者の反応	○留意点◇手立て●評価
導入 5	1 前回までの学習の流れを確認し、本時の学習課題を把握する。	○解説をつくるための手立てをふり返り自分たちの活動に活かすことを意識させる。
展開 1 2 0	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;"> <p>本時のねらい 他クラスの意見（意見交流シート）を使うことで、班での話し合いをより深める。 他の班の発表を聞いて自分たちの解説づくりに活かす。</p> </div> <p>1 班に分かれて話し合いをする。 意見交流シートに質問の返答が新たに書かれているため、それを読み、自分たちの話し合いにどう活かせるか検討していく。</p> <p>2 解説づくりの中で不十分な点を補うよう話し合いを行い、下書きプリントに加筆・修正を加えていく。</p> <p>3 話し合いの中から、発見があったことや、課題として追及していることなどについて報告発表できるようワークシートに記入する。</p>	<p>○質問に対して役に立つような返答が得られたか把握するよう促す。 ◇自分たちの解説をよりよくするための資料として使うことを意識させる。 ●書くことの交流を通して自分たちの意見に参考となるような視点を得られたか。</p> <p>○作品の読解は、内容について不明瞭な点を話し合ったうえで解釈し、自分たちの読みを提示できるようにする。 ◇参考になる資料や、他のクラスの意見などを確認させる。 ●本文の中から、問題となる点を見つけ出し、積極的に議論できたか。</p> <p>○途中報告となるので、議論の結論がでていなくても、どのような課題が見つかったのかを分かりやすくまとめる。 ◇時間は3分～5分程度に設定する。資料や原稿などで視覚情報として示したいものがある班にはICT機器を使用する。 ●相手に分かりやすく要点を絞って伝えることを意識しているか。</p>

<p>展開 2 2 0</p>	<p>1 報告発表をする。自分たちの班で問題となっている点や、解釈を導き出した点などに重点を置いて、発表をする。発表を聞いている生徒はワークシートにメモをとる。 (発表を行う複数班については、机間指導を通して授業者が判断する。)</p>	<p>○班は解消させ、前を向かせる。限られた時間内で、他の班にも参考となるような発表を行う。時代と文体の関係や、語りの視点、作品内の描写など、解説が書きやすくなるような観点を獲得させる。 ◇発表の中で重要と思われることを教師が板書にまとめる。他の班と関わりがある観点については質問させたり教師がつながり説明する。 ◇作業が進んでおり、参考になるような班に声掛けする。逆に作業が滞り、話し合いが円滑ではない班に、現状打破のために問題点を発表して意見をもらえるように促す。 ●他の班の進行状況をふまえ、成果を自分たちの班の活動にも生かすことができる。</p>
<p>まとめ 5</p>	<p>1 今日の班での話し合いと、報告発表を受け、作品の読解や評価を各自で再検討する。次回の解説完成に向けて必要な部分は何か、考えて準備しておく。</p>	<p>○班で話し合えるのは次回が最後であるため、何が課題として残っているか把握させる。 ◇書き上げるのに自分の時間が必要な生徒には次回までに準備をしてくるよう促す。 ●自分の分担に対する課題把握ができたか。</p>

(3) 板書計画

<p>ある時代によって描かれ方に違いがある。文体や表現の工夫に注目</p>	<p>○今日の課題 近代文学を読み継ぐために 意見交流シートと班の話し合いをふまえて、発表をしよう</p> <p>一、意見交流内容の検討や話し合いの続き ←</p> <p>二、発見したことや、議論の中心となったことを報告するためまとめる (No. 3 プリント) ←</p> <p>三、発表をする。(聞く人はプリントにメモ)</p> <p>(例) ⑤ 「女生徒」 (太宰治) (発表からポイントを書く)</p> <p>語りについて注目している</p> <p>(例) ① 「十三夜」 (樋口一葉) 結末をどうとらえるか。</p> <p>(解説に加えたいポイント) ・男女の恋愛①②③④ ・女性が主人公でも、語り手、</p>
---------------------------------------	--

(4) 本時の評価

- 班の活動において、他のクラスの意見を取り込み、議論を深める話し合いができたか。
- 発表を聞いて、自分たちの班に生かせるような観点をつかむことができたか。
- 作品を読解するにあたり、資料を活用したり自分の考えを明確にしたりしながら読みの可能性を探っていたか。

5, 考察

授業実践を終えて、引き続き残りの2時間の授業を行い、解説の完成、リライトの作成まで到達することができた。これまで費やしてきた読解の深みがそれぞれのリライトに活かされている。たとえば十三夜をリライトした生徒は最後の別れのシーンを下駄の音で表現した。直接的な別れの言葉が原作にないことを受けてそのような表現になった。人物の内面を淋しげな下駄の音で表現することで明治の文体とは違う、リアリティのあるリライト作品となっていた。班での話し合いや課題可決のための調べ学習を通して最終的に生徒は個々の読みをつかみ、それをリライトに創作するということで表現の場を得たといえる。本校の国語科の『創造』と深く関わる点である。突然何かを創り出すということは容易ではないが、比較や分析をもってこそ『創造』の種はまかれるのだろうと考える。自分の読みを投影させたリライトは、図書館で解説と一緒にまとめ開架している。原作とともに並べることで近代文学を読むのが苦手だと感じている下級生の参考ブックとなるだろう。このように図書館で棚に置かれているだけでは決して読まれないような作品にもスポットを当て、生徒間の交流によって読むことの手立てとなることができれば、本校の生徒の読書にも幅が広がるだろう。これらの活動には学校司書との連携が欠かせない。授業づくり、資料作成、調べ学習、読書活動、すべての場において協力していただいている。